

既婚女性の性役割と夫婦関係に関する研究

A Study of Married Women's gender role, and Husband-and-wife-related Relation

佐藤 容子

(八王子市子育て相談センター)

渡邊 映子

(東京成徳大学)

Yoko SATO (Childcare Consultation Center in Hachioji city)

Eiko WATANABE (Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究は既婚女性を対象にその女性の性役割観と結婚生活満足度との関連について検討した。その結果、妻の満足度は、豊かなやさしさ（女性性特性）と適宜たくましさ（男性性特性）を発揮する夫に対して高かった。換言すると、両性具有性タイプの夫が良い夫婦関係に重要であると考えられた。

キーワード：性役割、両性具有性、自尊心

I. 問題と目的

離婚に至る夫婦関係の不和の原因は様々である。すべての夫婦がこのような関係不和状態に陥っていくわけではないにしても夫婦の心のあり様は結婚当初から時間とともに確実に変化していく。夫・妻の不健康をもたらす要因ともなる夫婦関係について研究することは、良好な関係の継続・修復・改善につながる意義あることと考える。

1920年以降アメリカで結婚に関する研究は盛んになった。結婚・夫婦関係の研究の主要なアプローチには社会学的、人口動態的、社会的交換理論、行動観察的、認知・帰属理論からのもの、また成人の愛着関係のモデルによるアプローチなどがある。また別の視点から夫婦関係を捉える研究に、

社会文化的な背景を背負った男・女としてのあり方であるジェンダーからのアプローチがある。ジェンダーとは心理学や社会学の領域で性別を示す用語である。性別を示すには、セックス/ジェンダーの2つの用語が用いられることが多い。セックスは生物学的な性に基づいた男性性と女性性に限定されるが、ジェンダーは社会・心理学的性として男性性と女性性に関する社会的特性や特徴に限定して用いられている。たとえば、「たくましい」は男性性、「やさしい」は女性性などに意味付けされているのがそれである。そして、男女がどのように行動するべきかについての社会からの期待を、とくに性役割と呼んでいる。

近年、女性を取り巻く社会は大きく変動している。変動する社会の中では、ジェンダーの内容も

少しづつ変わりつつあると考えられる。個人差となるひとつのパーソナリティ側面として各人の発達過程の中で生み出されている性役割観・行動にも変化がもたらされるといえよう。

本研究では、増加している離婚を現代社会の現象と捉え、既婚女性を対象に、その女性の性役割を通して結婚生活との関連を明らかにすることを第一の目的とする。また、社会の変動とともに変化する性役割の問題が、女性の年代によってどのように違ってきているのかを明らかにすることを第二の目的とする。

II. 方法

本研究では、既婚女性を対象に性役割観を変数に、自尊心・生活満足度・妻役割達成感との関連項目との関連を質問紙によって調査した。

被験者は既婚女性を対象とするが、社会変動における性役割の年代による変化を検証するという目的のために、生育環境の違いによる誤差をさけるため、等質の集団と考えられる同一女子高等学校の同窓生を被験者として調査を行なった。

〈対象者〉

私立 S 高等学校（女子校）卒業の既婚者

- ・ 20歳代後半から30歳代前半
- ・ 40歳代前半
- ・ 60歳代前半

〈調査内容〉

性役割観と夫婦の関係を調査するために以下のような内容の調査票を作成した。

a) 性役割観

性役割尺度は東（1986～1993）に比較検討された [BSRI] に比べ尺度の妥当性が高いとされる Spence（1974）の The Personal Attributes Questionnaire [PAQ] の日本語版尺度を使用する。この尺度は男性性尺度（M尺度）、女性性尺度（F尺度）、社会的望ましさ（M-F尺度）の3つの下位尺度から構成される。各々8項目24項目

からなっている。これらの項目は、二極性次元で表現され各項目にある性役割特性がどの程度自己にあてはまるかを5段階で回答する。採点基準は質問項目ごとに0～4点を配点した5点スケールになっており、各下位尺度の得点範囲は0～32点である。高い得点は男性性を、低い得点は女性性を意味する。

b) 自尊感情

Rosenberg（1965）の Self-esteem 尺度10項目4段階評定を実施する。ローゼンバーグによる既存の尺度の邦訳版を使用し、設問に対してどの程度自分自身にあてはまるかを「そう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「そう思わない」の4段階から回答してもらう。

c) 妻役割達成感

土肥ら（1990）が Barnett & Baruch（1985）の妻役割について作成した尺度を元に作成した夫との人間関係に満足している程度を測定する妻役割達成感尺度10項目5段階評定を使用する。これは、結婚している女性の日々の満足感に大きな影響を与える妻としての達成感を測定する尺度である。

結婚している女性を対象に妻であることによって設問にどの程度当てはまると思うかを「よくあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」の5段階で評定する。配点は5から1点を与え、得点は10点から50点とし、高得点ほど達成感が高い。

d) 生活満足度

現実生活の中の家庭・仕事・友人関係・夫など7項目の生活満足度を5段階で評定する。現在の生活の中での満足感を「全くその通り」「その通り」「どちらともいえない」「違う」「全く違う」の5段階で評定する。

〈調査期間〉

2001年7月～8月実施。

〈調査方法〉

表1 妻の性役割観についての平均と標準偏差

		未分化	女性性	男性性	両性具有性
自尊心	N	35	21	23	30
	Mean	26.57	28.76	31.43	31.23
	S.D.	5.43	5.4	5.21	4.53
妻役割達成度	N	35	20	23	30
	Mean	35.94	37.9	39.48	37.83
	S.D.	8.53	9.48	9.87	10.37
生活満足度	N	35	22	23	30
	Mean	3.71	3.91	3.96	3.87
	S.D.	0.83	0.75	0.98	0.88

私立S高等学校の同窓会名簿から20歳代後半から30歳代前40歳代前半、60歳代前半の既婚者を対象に個別に質問紙を郵送で配布。回収は個別に返信用封筒で郵送してもらった。

〈サンプル〉

20歳代68人、40歳代153人、60歳代70人の291人に配布した。20歳代の回収率が悪かったので30歳代58人に追加配布、計349人。住所変更、無回答を含む14通が返送された。回収は20、30歳代32人（25%）、40歳代57人（37%）、60歳代23人（33%）の計112人（33%）であった。

〈本研究における測定方法〉

性役割観についてPAQ尺度を用いて4つのタイプに分類した。両性具有型、男性型、女性型、未分化型の分類基準は次の通り「パーセンタイル順位法」（東、1990）を用いた。

〈分析方法〉

1. 妻が自己評定した性役割観を両性具有性、男性性、女性性、未分化の4タイプに分類し、自尊心・妻役割達成感・生活満足度について分散分析をおこなった。
2. 妻が評定した夫の性役割観を両性具有性、男性性、女性性、未分化の4タイプに分類し、自尊心・妻役割達成感・生活満足度について分散分析をおこなった。
3. 年代別に自尊心・妻役割達成感・生活満足度について分散分析をおこなった。

III. 結果

【妻の性役割観との関連】

表1は、「妻の性役割観タイプ」の平均と標準偏差を示したものである。「自尊心」について、性役割観のタイプで分散分析をおこなった結果、表2に示したように性役割観タイプによって有意に差があった。チューキー法を用いた多重比較によると、性役割観の両性具有性タイプと男性性タイプが未分化タイプと比較して有意に自尊心が高かった（MSe=26.5, 1%水準）。女性性タイプと未分化タイプの間の平均の差は有意でなかった。「妻役割達成度得点」「生活満足度」「夫に対する満足度」について、性役割観のタイプで分散分析をおこなった結果、有意差はみられなかった。

表2 自尊心の分散分析表

	SS	df	MS	F値	有意確率
妻性役割観	483.6	3	161.2	6.1	0.001
誤差	2779.4	105	26.5		
合計	3263	108			

【妻の評定した夫の性役割観との関連】

表3は、妻の評定した「夫の性役割観タイプ」の平均と標準偏差を示したものである。「自尊心」「生活満足度」について、夫の性役割観のタイプで分散分析をおこなった結果、有意差はみられな

表3 妻の評定した夫の性役割観についての平均と標準偏差

		未分化	女性性	男性性	両性具有性
妻役割達成度	N	36	19	19	34
	Mean	34.42	40.21	33.21	42.71
	S.D.	9.04	8.57	9.43	8.16
生活満足度	N	37	20	19	34
	Mean	3.57	4	3.74	4.15
	S.D.	0.96	0.92	0.74	0.78
家庭満足度	N	37	20	19	34
	Mean	3.51	4.25	3.58	4.12
	S.D.	1.12	0.85	0.77	0.87
夫に対する満足度	N	37	20	19	34
	Mean	3.43	3.85	3.11	4.21
	S.D.	1.14	1.39	1.15	1.04

かった。「妻役割達成度得点」について、夫の性役割観のタイプで分散分析をおこなった結果、有意に差があった。チューキー法を用いた多重比較によると夫の性役割観を両性具有性タイプと捉えている妻は、夫を未分化タイプ・男性性タイプと捉えている妻に比較すると、有意に妻役割達成得点が高かった (MSe=76.8, 1%水準)。両性具有性タイプと女性性タイプの間の平均の差は有意でなかった。表4は、「夫に対する満足度」について、夫の性役割観のタイプで分散分析をおこなった結果、有意に差があった。チューキー法を用いた多重比較によると夫の性役割観を両性具有性タイプと捉えている妻は、夫を未分化タイプ・男性性タイプと捉えている妻に比較すると、有意に夫に対する満足度が高かった (MSe=1.35, 1%水準)。両性具有性タイプと女性性タイプの間の平均の差は有意でなかった。夫婦関係の維持に重要と思われる項目の中の「愛情」について、夫の性役割観のタイプで分散分析をおこなった結果、有意に差

表4 夫に対する満足度の分散分析表

	SS	df	MS	F値	有意確率
夫性役割観	18.21	3	6.17	4.58	0.005
誤差	142.98	106	1.35		
合計	161.49	109			

があった。チューキー法を用いた多重比較によると夫の性役割観を両性具有性タイプと捉えている妻は、夫を男性性タイプと捉えている妻に比較すると、有意に「愛情」が重要と思っていた (MSe=1.44, 1%水準)。他のタイプの間の平均の差は有意でなかった。

【年代別の分析結果】

表5は、「年代別」の平均と標準偏差を示したものである。「妻の性役割観」についても妻の評定する「夫の性役割観」「自尊心」について、年代別に分散分析をおこなった結果、有意差は見られなかった。

表5 年代別についての平均と標準偏差

		20.30歳代	40歳代	60歳代
自尊心	N	32	56	22
	Mean	30.94	28.41	29
	S.D.	5.23	5.89	4.33
妻性役割観	N	30	57	22
	Mean	2.8	2.28	2.27
	S.D.	1.21	1.19	1.12
夫性役割観	N	32	56	21
	Mean	2.69	2.43	2.14
	S.D.	1.28	1.24	1.24

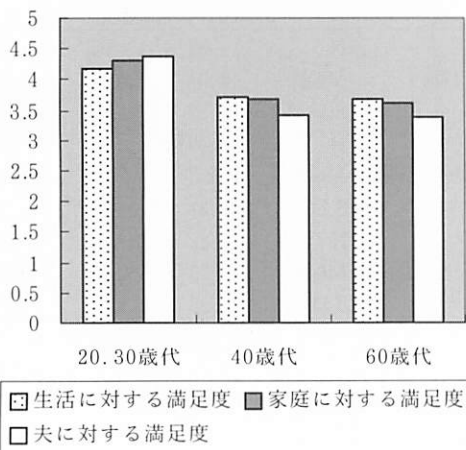
表6は、「生活満足度」「家庭満足度」「仕事満足度」「夫に対する満足度」についての平均と標

準偏差と年代別の分散分析表を示した。結果は、「生活満足度」「家庭満足度」と「夫に対する満足度」に有意な差がみられたが、「仕事満足度」は有意差がなかった ($F(2,102) = .88$)。有意差のあった3つの満足度について、チューキー法を用いた多重比較によると20、30歳代は、40歳代に比べ「生活満足度」が高かった ($MSe = .75, 5\%$ 水準)。「家庭満足度」は、20、30歳代は40歳代と60歳代に比べ「家庭満足度」は有意に高かった ($MSe = .75, 5\%$ 水準)。40歳代と60歳代の間の平均の差は有意ではなかった。「夫に対する満足度」は、20、30歳代は40歳代、60歳代に比べ有意に高かった ($MSe = 1.30, 1\%$ 水準)。40歳代と60歳代の間の平均の差は有意ではなかった。図1は生活満足度を年代別に示したものである。

表6 満足度について年代別の平均と標準偏差

		20,30歳代	40歳代	60歳代
生活に対する満足度	N	32	57	22
	Mean	4.19	3.72	3.73
	S.D.	0.9	0.86	0.83
家庭に対する満足度	N	32	57	22
	Mean	4.31	3.7	3.55
	S.D.	0.86	1.02	0.86
夫に対する満足度	N	32	57	22
	Mean	4.38	3.42	3.36
	S.D.	1.01	1.24	1.05

図1 年代別の結婚生活満足度



IV. 考察

本研究は、性役割に焦点をあて、既婚女性を対象に結婚との関連を妻の立場から調べた。増加する離婚の多様な原因の諸要因の中で、その一側面をしめる性役割が夫婦関係にどのように影響しているか、また女性を取り巻く社会が大きく変動する中で社会状況に応じて変わる性役割が、年齢の違いによってどの程度変化しているのか、を調べることを目的とし、自尊心や妻役割達成感や生活満足度との関連を調査したものである。その結果は以下の通りであった。

自己の現況に満足し自信を持つ程度を示す「自尊心」について、社会適応的な両性具有性タイプが最も自尊心が高いという理論（遠藤、東）をもとに、両性具有性タイプの性役割観の持ち主が結婚生活の満足度も高いのではないか、という仮説をたて調査をおこなった。既婚女性（以下、妻）の自己評定した4つに分類された性役割観のタイプ（両性具有性タイプ・男性性タイプ・女性性タイプ・未分化タイプ）との関係を調べた結果では、男性性>両性具有性>未分化のタイプの順に自尊心が高いことが示された。

遠藤（1992）によれば、最高のセルフ・エスティームの所有者は性役割の面では両性具有性を有し、低い人は未分化な人とされる。また東（1996）のジェンダー・カテゴリーと自尊感情の比較でも自尊感情の高低は、両性具有性>男性性>女性性>未分化の順に生じることが報告されている。本研究で得られた未分化タイプの自尊心が低いという結果は先行研究と一致した。しかし両性具有性が最も自尊心が高いという結果は得られなかった。本研究の結果で最も高い自尊心の持ち主は、男性性タイプであった。自尊心が両性具有性より男性性と関連があったとするこの結果は、第1章でTaylorらが指摘する両性具有性の近年の論点に関わる問題と思われる。すなわち、そこでは高い自尊心は、両性具有性と男性性にかならずしも一

致した結果が現れないことが論点となっている。本研究の結果では、妻達の自尊心の高さが両性具有性に埋め込まれた社会的評価の高い男性性に支えられているという理論を支持する結果となった。

妻の評定した夫の4タイプの性役割観と自尊心との関係では、有意差はみられなかった。

そして年代別に「自尊心」を調べた結果でも、年代別での有意差はみられなかった。もともと女性の性役割が自尊心を高めるものではないといわれるが、加齢と共に高まるものでもないことが明らかになった。

次に、夫との人間関係の満足度を示す「妻役割達成感」について、妻の性役割観の4つのタイプに有意な差はなかった。

妻の評定した夫の性役割観のタイプは、両性具有性>未分化>男性性タイプの順に妻役割達成得点が有意に高かった。

年代別に妻役割達成得点をみると、20、30歳代が高く年齢と共に低下していった。20、30歳代の高さは結婚年数との関連も考えられるが、妻が夫との人間関係に満足し、妻としての役割を果たそうと思わせるのは、夫の外社会で適応力のある男性性特性の強さより、妻を思いやるやさしさのある女性性特性を示してくれることが重要であることが示唆される。

「生活満足度」については、妻の性役割観の4タイプの間には有意な差みられなかった。自己の現状をどのように評価できるか、自己肯定感、生活全般の満足度に一致するもので自尊心と同様の結果が得られることを予想したが、性役割観タイプ間に差はみられなかった。しかし、この結果は女性の性役割が自尊心を高めるものでないことに共通するかもしれない。一般的な女性の自尊心の低さが、タイプ間での差をつくらないのではないかとと思われる。

妻の評定した夫の性役割観4タイプと「生活満足度」に有意差はなく、「夫に対する満足度」では夫を両性具有性タイプと評定した妻は満足度が

高く、未分化・男性性タイプと評定した妻の満足度は低かった。この結果からは、妻役割達成感と同様に妻は男性性が強いばかりでは満足感を得られず、女性性を適応的に発揮できる夫に満足していることが明らかになった。

「生活満足度」を年代別にみると、「家庭生活に対する満足度」「夫に対する満足度」は共に20、30歳代>40歳代>60歳代の順に低くなった。「生活全般に対する満足度」については40歳代が最も低かった。

中年期は、身体面の機能の衰えはまだ軽度であるが、衰えを予測されるような事態にであったり、精神面では職業上の様々な問題や子育てから子供の独立や親の介護、夫婦関係など家庭内の問題など様々なライフイベントに出会う。女性の社会進出、少子化・高齢化などの社会変動は家事・育児・介護に携わる女性に現実生活に変化を与えているが、女性を取り巻く社会変動の中での一般的な外面的平等意識といまだ変わらぬ伝統的性役割の実状との狭間にしばられ、多くの中年期女性たちは葛藤に悩んでいると思われる。こうした中年期女性が自分の現況の満足低下を示していると考えられる。自己を再び見つめなおす時期といわれる中年期、女性は多くライフイベントの中で揺れている。このようなことが生活への満足度を低下させ、人生への見直しをすることとなっていくことにつながると考える。

このように妻の立場から、妻の自己評定した性役割観と妻の評定した夫の性役割観を通して結婚生活との関連を調べた結果から、性役割について社会的評価が高い男性性特性が、妻自身の自尊心を高めている。また妻にとって満足な結婚生活に重要なのは、夫の女性性豊かなやさしさであることが示唆された。社会的には男性性特性が強いことが高く評価されても、そのような男性性タイプの夫では家庭内の妻の不満の原因となると考えられる。妻自身の性役割観によっても夫に求める役割期待は異なるであろう。しかし一般的に妻は、

男性性・女性性双方の特性を社会・家庭生活の中で適応的に発揮できる両性具有性タイプの夫であれば結婚生活に満足することが示唆される。時代とともに家庭に止まっている役割から抜けだし、社会に進出しつつある妻たちにとっても性役割は変わってくる。家庭に適応していた女性性特性ばかりでなく、社会に適応する男性性特性を身につけることが必要であろうと考えられる。

性役割は、男・女という性別に対して社会が期待する行動様式・態度・パーソナリティ特性などの役割期待であるが、わが国では今まで男性は強く・たくましく仕事で稼いで一家を支え、女性はやさしく素直・従順で家事・育児にいそむむというような姿が伝統的に男女の役割として期待されていた(柏木、1973)。しかし、現代では産業発達とともに女性の家庭内労働は軽減されている。例えば、赤ん坊のおむつが紙おむつになることで洗濯の手間は省け、電子レンジや豊富な食生活も家事を簡略化させている。また少子化・高齢化がすすむことにより女性が育児に関わる時間は短くなったり、家事・育児に協力できる高齢者の親が身近に存在して援助するという環境もある。つまり、個人差・家庭差はあるにしろ妻がいそむむ伝統的役割の家事・育児の労力は確実に軽減され、女性が個人として生きていくことについて考えたりする時間を持つようになった。女性の自立意識・平等意識を促進する環境が整ってきいることになる。そのような中で多くの女性が社会に進出し経済力を持つようになることは男性に対しては経済力の面での依存が少なくなる。そして女性が男性に求めるものは経済力以外の人間的な資質となっていくことが考えられる。

社会的には高く評価される男性性特性であるが、家庭内で高い評価を得るためには女性性特性も適宜発揮できる両性具有性タイプのもつ柔軟性が、より良い夫婦の関係に重視されていると考える。

近年増え続ける離婚の原因の諸要因のひとつとして性役割をとりあげた本研究において、性役割

を調べた妻の立場からの結果では、自分の夫は外の社会では強くたくましく、家庭ではやさしいと妻から思われることが、家庭円満につながるということが明らかになった。かつては通用したかもしれない男気たっぷりの男性は妻の不満を溜め込むことになるかもしれない。

夫に対して女性が多くのことを期待しているという研究結果も報告されているように、本結果も妻は夫に男性性・女性性ともに豊であることを望んでいる。しかし、社会で活躍する場の増えた女性も夫への多大な期待を求めただけではなく、女性自体が社会人として評価を得るには自尊心を高める男性性特性を身につけることが重要な課題になるであろう。両性具有性タイプ同士の夫婦には夫婦間の不仲を訴えるものが少ないといわれるように、夫婦共に性役割での柔軟な態度がより良い結婚生活に重要なものと考えられる。

参考文献

- Baucom, D.H., Notarius, C.I., Burnett, C.K., & Haefner, P. 1990 Gender differences and sex role identity. In F.D. Fincham & T.B. Bradbury (Eds.), *The psychology of marriage*. Guilford. pp.150-171.
- Bem, S.L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫 1990 多重な役割従事に関する研究－役割従事タイプ、達成感と男性性、女性性の効果－*社会心理学研究*, 5, 137-145.
- 遠藤辰雄 1992 *セルフ・エスティームの心理学* ナカニシヤ出版
- 東清和 1990 心理的両性具有 I - BSRI による心理的両性具有の測定－早稲田大学教育学部・学術研究(教育心理学編), 39, 25-36.
- 東清和 1993 心理的両性具有 III - PAQ 日本語版の検討－早稲田大学教育学部・学術研究(教育心理学編), 41, 73-84.
- 東清和 1996 自尊感情の性差研究に関する方法論

- 早稲田大学教育学部・学術研究（教育心理学編），44，17-28.
- 東清和・今津芳恵 2000 男性性・女性性と社会的自尊感情との関連性 早稲田大学大学院教育学研究科紀要，10，1-11.
- 東清和・鈴木淳子 1991 性役割態度研究の展望 心理学研究，62，270-276.
- 平木典子編 1994 講座家族心理学2 夫と妻 金子書房
- 堀洋道監修・山本真理子編 2001心理測定尺度集I サイエンス社
- 井上輝子・江原由美子 1991 女性のデータブック 有斐閣
- 石田英子 1993 性別アイデンティティのデモグラフィック規定因に関する基礎研究 社会心理学研究，8，56-63.
- 伊藤忠弘 1994 自尊心概念及び自尊心尺度の再検討 東京大学教育学部紀要，34，207-215.
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学研究，41，293-301.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究，26，1-10.
- 伊藤裕子 1997 青年期における性役割の形成 風間書房
- 柏木恵子 1973 現代青年の性役割の習得 依田新編 現代青年心理学講座第5巻 現代青年の性意識 金子書房
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となること」による人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究，第5巻 第1号，72-83.
- 柏木恵子・高橋恵子編 1995 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房
- 数井みゆき・大野祥子・柏木恵子 1996 現代成人男女の家族意識 1995年度東京女性財団女性事業年次報告書，62-63.
- 数井みゆき 1998 結婚・夫婦関係の心理学 その理論と実証的研究の展望 柏木恵子編 結婚・家族の心理学 ミネルヴァ書房
- 厚生労働省白書 2001 人口動態調査
- 永久ひさ子 1998 結婚・夫婦関係の心理学 その理論と実証的研究の展望 柏木恵子編 結婚・家族の心理学 ミネルヴァ書房
- 日本性教育協会 1986 結婚をめぐる日米比較調査報告書
- 日本青少年研究所・日本性教育協会 1986 結婚をめぐる日米比較調査報告書 日本性教育協会
- 岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究，33，23-34.
- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- 岡崎奈美子・柏木恵子 1995 女性における生活の満足感－既婚・有子女性の場合－ 発達研究，11，111-124.
- 佐藤悦子 1999 夫婦療法 金剛出版
- 生命保険文化センター 1987 女性の生活意識に関する調査
- 下仲順子 1980 青年群との対比における老人の自己概念：世代差、性差を中心として 教育心理学研究，28，303-309.
- 下條英子 1998 ジェンダー・アイデンティティ 風間書房
- Spence, J.T., Helmreich, R., & Stapp J. 1975 Ratings of self and press on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. Journal of Personality and Social Psychology, 32, 29-39.
- 菅原ますみ・小泉智恵・詫摩紀子・菅原健介 1997年度 夫婦関係と子どもの精神的健康との関連－学童期の子どもを持つ家庭について－ 安田生命社会事業団研究助成論文集, 33, 144-150.
- 詫摩紀子・八木下暁子ら 1999 夫・妻の抑うつ状態に影響を及ぼす夫婦間の愛情関係について 性格心理学，7，100-101.
- Taylor, M.C. & Hall, J.A. 1982 Psychological androgyny: Theories, methods, and conclusion. Psychological Bulletin, 92, 347-366.
- 渡邊恵子 1995 青年期後期における性役割の認知と自尊心 日本女子大学紀要 人間社会学部，6，145-159.
- 渡邊恵子 1996 青年期後期における性役割－大学生

の対人場面における性役割行動・性役割観・性役割
受容の性差－ 日本女子大学紀要 人間社会学部, 7,
89-100.

渡邊恵子 1999 高学歴女性の自尊心と性差観・育児
感－大学20年後の調査から－ 日本女子大学紀要
人間社会学部, 10, 195-208.

A Study of a married Women's gender role, and a husband-and-wife-related Relation

Yoko SATO (Childcare Consultation Center in Hachioji city)

Eiko WATANABE (Tokyo Seitoku University)

ABSTRACT

The purpose of this research is to clarify a relationship between married women's gender role and the degree of satisfaction with their married life. As a result of this research, when their husbands had tenderness and brawniness with them, the degree of satisfaction with their married life became the highest. It became clear that it is important for maintaining a good husband-and-wife relationship in which a husband is a androgyny type.

KEYWORDS : Sex roll, Androgyny, Self-esteem